

『マンズフィールド・パーク』における ファニー・プライスのプロテスタント的精神

中 尾 真 理 *

Fanny Price and Protestant Ethic in *Mansfield Park*

Mari NAKAO

要 旨

小説『マンズフィールド・パーク』は、裕福な gentry の一家と、この一家に養われている若い女性ファニー・プライスの成長と自立の過程を描いている。ファニーは一家にとって部外者であり、従順でおとなしい性格でもあるために、疎外感を味わう。だが、彼女のアウトサイダーとしての視点は、彼女の周囲の人々を冷静に眺めるのに役立った。オースティンはこの作品で、ファニーを通して、ジェントリーの社会を客観的に描こうとしている。二つのジェントリーの家族、田舎で土地の経営にあたるパートラム一家と、土地を離れ都会で消費生活を楽しむクロフォード兄妹が登場するが、好意的に描かれているのはパートラム家の方である。パートラム家は道徳的、勤勉、ストイックであり、ヒロインが最終的に、一家に迎え入れられるのも彼女の実務能力、「有用性」が認められたからである。資本主義最盛期の英国上層ジェントリーの一家に「プロテスタント的」な精神が見てとれる。

Mansfield Park は Northampton の大地主 Sir Thomas Bertram の所有地 Mansfield Park を舞台に、この一家に養育されることになった姪の Fanny Price と、彼女を取り巻く准男爵一家が主人公である。言わば、部外者である Fanny が、Bertram 家の一員として受け入れられるまでの過程が、次男 Edmund への恋と、若い地主 Henry Crawford の求婚などを交えて描かれていく。

Austen は一貫して、若い女性の自己形成の過程を描いた作家である。この小説も基本的には、ヒロイン Fanny Price の物語であり、彼女の結婚と、それに至る自己形成の物語である。ヒロインを取り巻く背景が田舎の地主層 (gentry) にほぼ限定されているのは、Austen の小説の通例と言ってよいだろう。だが、この小説では、ヒロインが中心となる家族の本当の娘ではないというところが、重要である。Fanny という部外者を通して、gentry の世界に批判的な視点が生まれてくるからである。Fanny は最後に、地主一家に迎え入れられ、彼女自身も結局、自らの判断で田舎地主の生活を選び取るのであるが、それは部外者の立場から Bertram 家の短所・長所を経験したうえでの厳しい選択の結果なのである。

ところで、この小説には「土地 (estate)」についての言及が目につく。例えば、「庭園改良 (improvement)」がひとつのモチーフとして繰り返して取り上げられ、Mr. Rushworth の屋敷 Sotherton Court の庭の場面は重要な場面のひとつである。その他、牧師館の庭をめぐる Mrs. Norris と Grant 夫妻の確執、Sir Thomas の西インド諸島 Antigua における農園の経営についての言及、Fanny が Portsmouth で思い出す Mansfield の田園の美しさ等、どれも「土地」と結びついたものである。

こうした「土地」への関心は、道徳的な次元で Fanny の物語とかがわっている。例えば、Mr. Rushworth の「庭園改良」のエピソードである。「庭園改良」とは18世紀から19世紀にかけて、貴族や地主の間で、邸宅と「土地」の調和を図り、景観を良くするために、「土地」全体を絵画風に模様替えることが流行したことをいう。だが、「改良」問題は Mr. Rushworth の庭の問題に止まらず、Henry Crawford の人格改造は可能かという問題に発展する。それは Fanny と Henry Crawford の結婚にかかわってくる大事な問題である。

このように gentry の生活の基盤である「土地」とのかかわりは、その所有者である gentry たちの倫理にかかわってくることになる。つまり「土地」を通して gentry の在り方が問われるわけである。

gentry は Austen の小説の世界の基盤である。彼女自身もその一員であった19世紀初頭のイギリスの gentry を彼女はどのようにとらえ、*Mansfield Park* でどのように描いているのだろうか。また、「財産も教育も縁故もない²⁾」(p.3) 退役海軍将校の娘であり、Bertram 家では「貧しい親戚 (poor relation)」にすぎないヒロインの Fanny 自身の問題は、大地主 Bertram 一家の問題と、どうかかわってくるのだろうか。

本論は、gentry の在り方についての作者の考え方を明らかにし、それがこの小説の主ストーリーである Fanny の物語と、どういう関連を持つかという点について、見ようというものである。

I Fanny Priceの視点

Feminism 批評は³⁾、Jane Austen が常に女性を主人公として、女性の視点から、身の回りの現実を描いたということに、意味を見いだしている。男性中心の社会において、女性は必然的に、革新的な存在とならざるを得ないからである。小説 *Mansfield Park* において、Austen は非力な女性のなかでも、特に、年若く、貧しいヒロインを設定した。Fanny Price は小柄で、体力にも乏しく、目立つほどの美貌にも恵まれないし、極度に内気で、遠慮深いという地味なタイプの女性に描かれている。このように、圧倒的に非力なヒロインは、かえって、彼女を取り囲む社会の許容度を推し量るバロメーターとなり得る。Fanny Price は准男爵家の家族のありかた、Henry Crawford の Regency London、Portsmouth の貧しい gentleman, Mr. Price の一家を考察する際に指標的役割を果たすのである。

Fanny は十歳の時に、辛うじて gentleman と呼べる程度の、貧しい退役海軍将校の家庭から、伯母のいる Mansfield Park (以下、M.P.と略) に引き取られた。

M.P. は准男爵 Sir Thomas Bertram の本拠地 (country seat) で、「周囲五マイルの本格的なパーク」に、「場所もよく、ほどよく隠れていて、どんな全国紳士邸宅版画集に載っても恥ずかしくない、広大な、近代建築の大邸宅 (p.48)」が建っている。一家の当主、伯父の Sir Thomas は義妹の窮状を見かねて Fanny を引き取ったという、親切で、有徳の人物である。だが、家庭内では、John Lock の言う「子供を愛してはいるが、絶えず堅苦しく、権威主義的な態度と、常に子供に距離を置くことで、統制をしたがる父親」にそっくり当てはまるのだった⁴⁾。伯母の Lady Bertram もおっとりした好人物だが、「美しく着飾ってソファに座り、

美しくもないし役にもたない手のこんだ刺繍でもしながら、子供のことより狎のことを考えている」(pp.19-20)という具合で、主婦としても母親としても失格である。

Fanny は、この伯父、伯母のもとで成長するのだが、Bertram 家における彼女の立場は決して恵まれたものとは言えなかった。というのは、この家にはもうひとり Mrs. Norris という伯母がいて、Lady Bertram に代わって主婦役を務めていたが、この伯母はけちでやかましいだけでなく、Fanny に対しては意地悪な God Mother であったからである。

この Mrs. Norris は、怠惰な Lady Bertram とは対照的に、絶えずせわしく動き回っており⁹⁾、勤勉精神の象徴のような人物であるが、Fanny を一家の「貧しい親戚」として位置づけるのにも熱心である。彼女の口癖は、「……あなたにくれぐれもお願いしておきますけれどね、出しゃばってはいけませんよ……覚えておきなさい、どこにしようとも、あなたが一番身分が低く、あなたが最後なのですよ……」(p.221) というのである。

Fanny は Mrs. Norris の進言で「(Sir Thomas の) 娘たちから遠すぎず、女中たちのすぐ近く」(pp.9-10)にある「小さな白い屋根部屋」をあてがわれることになった。この 'little white attic' は「貧しい親戚」である Fanny の家庭内での地位を如実に示しているとも言える。

Bertram 家には、Tom、Edmund、Maria、Julia の四人の子供がいた。Fanny はその中の最年少である。これはいろいろな意味で、彼女が一家の弱者であることを示している。しかも、Fanny は年令の割に身体が小さく、容貌にも、態度にも、何ひとつ目立つところがなかった。Bertram 一家は揃って背が高く、堂々としており、美貌でもあることが強調されているから、Fanny の凡庸さが目立つよう意図されていることは明白であろう。(背が高く堂々としていることは、この時代、優美さの必要条件と考えられていた⁹⁾)

Fanny は聡明さの点でも、いとこたちより劣っていた。彼女は才女型ではなく、努力家なのである(そのため、批評家からも、優等生であると非難されることが多い)。その上に、Fanny は「極端に臆病で恥ずかしがる(p.12)」性格であったが、このような性格が、Fanny の Bertram 家での生活を一層、窮屈なものにしていたとも言えるだろう。Fanny は 'I can never be important to any one.' (p.26) という屈折した思いから脱却することができない。18歳になっても、Fanny はまだそうした思いを引きずっていたのである。

このような 'nobody' としての Fanny 像の設定は、ヒロインとしては魅力に乏しいかもしれないが、観察し、報告するナレーターとしては好適である。劣等感と被害者意識は周囲の観察の絶好のアンテナである。また、成長途中の精神的に未熟なヒロインを設定する方法は、教養小説では良く見られることである。Fanny が自分の弱さを克服し、「つまらぬ人間」から脱却し、周囲の人々に自分の真価を認めさせることができるようになれば、Fanny の物語は完了するわけである。

Fanny にはただ一人、味方になり、親身の愛情を注いでくれる保護者があった。次男の Edmund である。彼は Mrs. Norris の意地悪から Fanny を護り、読書を薦め、情操面の教育にも心を砕く教師でもある。Fanny は感謝の心から、いつしか彼を愛するようになるのだが、彼の方はそれには気がつかない(これは Austen の小説に多いパターンである)。

このような状況のもとに、一家の隣人として Crawford という兄妹が現れる(彼等は Bertram 家と同じ地主階級であるが、gentry にとって生活の本拠地である田舎を離れ、London で暮らしている)。この裕福な若い地主の Henry Crawford とその妹 Mary は、Bertram 家の子供たちにとって、理想的な結婚候補者と思われた。だが、実際には、彼らは Jane Austen の小説に必ず登場する「魅力ある悪人(charming villain)」であって、彼らのおかげで

M.P.は少なからぬ混乱に陥るのである。

Austen の「魅力ある悪人」とは、地位も財産もあり、人一倍、才能にも美貌にも恵まれているが、道徳心の欠如した人間を指し、大抵は誘惑者 (seducer) である。Henry Crawford はスマートな青年だが、「想像しうる限り最悪のプレイボーイ (p.43)」という Mary の言葉そのままの人物であり、Mary は Mary で、才色兼備だが、現実的で打算的な女性である。ただ、この二人は非常に人当たりがよく (aimiable)、物腰が洗練されており、誰にも、読者にさえも、なかなかその真実が見抜けない。Bertram 家の二人の娘 Maria と Julia は、Henry に夢中になった。Maria はそのとき既に婚約中の身だったが、Henry は平気で Maria に接近していく。Edmund は Mary を好きになり、Mary も Edmund に引かれるが、彼が財産相続人である長男でないことにこだわって、色よい態度を見せない。牧師になるつもり of Edmund は懊悩し、Maria と Julia が Henry をめぐって対立していることにも気がつかないほどである。

このように、都会的でスマートな兄妹が出現しただけで Bertram 家のメンバーがそろって醜態を見せたという事実を、我々はどう受け止めるべきだろうか。Bertram 家では、その時、Sir Thomas が家を留守にしていた。父親のいない間に、家族がつかの間の解放感に浸ったとすれば、Sir Thomas の家長としての影響力は表面的なものであり、その内容にも問題ありと言わねばならない。子供達は Maria の婚約者 Mr. Rushworth の「庭園改良」計画に同調し、馬車をつらねて彼の古い屋敷を訪問したり、London で大流行のセンセーショナルな芝居を居間で稽古したりするが、父親の存在が忘れ去られると共に、Mansfield Park を律していた道徳律も次第に忘れ去られていく形である。自由闊達な Crawford 兄妹に影響され、各人が己の欲望のままに行動し始める。Tom は長男としての責任を忘れ、Maria は婚約中の身であることを忘れ、Edmund は Fanny を保護してやることを忘れてしまう。それは自由で活気のある毎日をもたらしたが、不和や嫉妬が生じるのを避けるわけには行かなかった……

London から来た Crawford 兄弟は、家柄、容姿、才能、洗練されたマナー、加えて、人当たりのよさと、非の打ち所のないように見えて、実は M.P.の秩序の破壊者である。M.P.の住人は誰もそれを見抜けないが、ひとり、ヒロインの Fanny だけは彼らの魅力に目がくらむこともなく、彼らが巻き起こす騒ぎを冷静に見守っていた。

Bertram 家の「貧しい親戚」にすぎない Fanny が家族の中で孤立しているにもかかわらず、Crawford 兄妹の悪影響をはねつけることができたことは重要である。疎外されていたからこそこれが可能だったのである。一同が Sotherton Court へ行く時も、Fanny は Edmund の犠牲的行動がなければ行けなかっただろうし、芝居にも一人だけ参加せず、苦い孤独を味わった。この孤立感が Fanny を冷静にし、Bertram 家本来の考え方に基づいて行動する余裕を与えたのである。家族の他のメンバーは、平生の M.P.の生活を大きく逸脱して、Crawford 兄妹の行動に巻き込まれる形になったが、Fanny だけは Crawford 兄妹のすべてに反撥した。古い並木を切り倒す計画、流行の芝居を田舎の屋敷で軽々しく上演しようという試み、牧師や親などの権威を茶化すような態度、金が全てを解決するという Mary の考え……

Fanny の意見は、留守中の Sir Thomas の意見を代弁するものでもある。Fanny と Crawford 兄妹の対立は、実は Mansfield Park と London の対立である。この点について、さらに詳しく見ることにしよう。

II gentry の世界

Bertram 一家と Crawford 兄妹は同じ上層 gentry に属していると言ってよい。ところ

が、同じように裕福な gentry でも、Bertram 家と Crawford 家では、その在り方も価値観も全く異なっている。Bertram 家の気風は謹厳な Sir Thomas その人に象徴されるように「禁欲 (Stoicism)」であり、Mrs. Norris が些か戯画化して表現している「勤勉 (diligence)」であり、牧師志望の Edmund が示す「誠実 (honesty)」である。これに Lady Bertram の表す「静謐 (serenity)」と Fanny の「素朴 (innocence)」を加えれば、M.P. の価値を言い得たことになるだろう。一方、Crawford 兄妹のそれは「人当たりの良さ (amiability)」であり、「個人の自由 (individual freedom)」である。この「自由」には、一切の道徳的規範 (特に性道徳) からの自由が含まれることは言うまでもない。

この二つの家族の価値観の違いは、経済的要因によるものとは考えられない。なぜなら、Henry Crawford の年収は4000ポンドでしかなく、Sir Thomas はその倍の1万ポンドはあると考えられるのに、Bertram 家の暮らしの方がむしろ、堅実だからである。違いはむしろ、Bertram 家が「田舎」とどまっているのに対し、Crawford 兄妹が「田舎」を離れ、おおいに都市生活を楽しんでいることに求めるべきだろう。

gentry 階級にとって、田舎に住むか、都会に住むかという問題は単なる好みの問題にとどまらない。地主にとって田舎は、彼らの本拠地である。自ら居住し、土地の経営・管理を行なう country seat において、gentry は司法、行政、文化、福祉の面で住民たちに大きな影響力を持っている。貴族と gentry の違いは、その影響力が全国規模であるか、一地方に止まるかの違いにすぎない。

そうした gentry にとって London は、season 毎に出掛けていき、社交を楽しみ、買物をする場所である。Weymouth, Brighton, Bath といった保養都市についても同じことが言える。gentry にとって田舎は生産の場であり、都会は消費の場である。London などの都会へ行くには旅費や滞在費など費用がかさむので、この贅沢は裕福な gentry だけの楽しみだった。Bertram 家は gentry の中でも大領主 (great landlord) に匹敵する収入がある (推定年収約10,000ポンド⁹⁾)。毎年 London で社交 season を過ごすことが案に出来る年収である⁹⁾。だが、夫人の Lady Bertram が社交を嫌うので、Sir Thomas は London に住まいを持つことをやめている。結果的に Bertram 家は、都会生活とは距離をおいていることになり、地方生活に専念していることが、その特徴となっているのである⁹⁾。

一方、Norfolk の地主である Henry Crawford は「住まいの恒久化、交際範囲が限られること」(p.41)を嫌って、London その他の新興保養都市で暮らし、土地の経営は管理人任せにしている。ところで、当時の London は後に Regency London と言われ、Beau Nash 風の優雅で洗練された社交文化の中心だった。時の摂政皇太子 (後の George 4 世) は有名な伊達者で、芸術のパトロンでもあったが、不品行でも有名だった。Austen が彼を嫌っていたことは、*Emma* を皇太子に献呈したときの経緯からも、書簡からも明らかである⁹⁾。また、Austen の作品に登場する悪漢たち (villains) 一たいていは魅力ある誘惑者 (seducer) である一がほとんど、London から来ていることも、この際興味深い事実である。

こうして見ると、Bertram 家と Crawford 家の相違は「田舎」対「都会」ということになりそうである。London は魅力的だが、道徳的退廃と結びついており、作者が常にこの点を問題視していたことは明らかである。「田舎の innocence」に対し、「都会の sophistication」というのは陳腐な図式であるが、gentry にとって、都会と道徳的退廃がどういう意味で結び付くのかという点について、さらに掘り下げてみたい。

gentry としての Bertram 家と Crawford 家の違いを突き詰めていくと、彼らの「土地」とのかかわり方の相違が問題になる。Tonny Tanner は、Bertram 家を「在地地主 (resident

native gentry)」、Crawford 家を「不在地主 (non resident gentry)」と呼び、両者の違いは「土地に対する貴族的な愛着 (aristocratic attachment to the land)」の有無にあるとしている¹⁰⁾。

「土地に対する貴族的な愛着」とは何であろうか。「不在地主」である Henry Crawford にとって、土地所有は単なる収入源にすぎない。都会では「金が全てを解決する」のである。これに対し、Bertram 家は所領地で小作人と共に暮らしている。London から来た Mary は、Mansfield ではいくら金を積んでも農繁期に馬車を借りることができないと知って驚く。M.P. は農村共同体の中にあり、Sir Thomas はそのリーダーとしての責任を強く意識しているのである。Antigua (西インド諸島) の農園の経営が悪化すれば、Sir Thomas は海を越えて出掛けて行く。彼にとって、土地の経営はそれほど大事である¹¹⁾。

こうした Bertram 家的な在り方は、「土地に対する愛着」を基盤としており、かつての「封建領主」を思わせるところがある。Sir Thomas は支配するものとしての 'noblesse oblige' を自覚し、貴族的な自負心さえ感じとれる。反対に、Henry Crawford が土地の経営を管理人任せにしているのは、彼が「土地」に対して特別の愛情を持っていないからであると解される。

また「土地への愛着」ということで、改めてこの作品を眺めてみると、この小説では「土地」への愛着が、極めて具体的な形で示されていることに気がつく。例えば、「地所 (estate)」に寄せる gentry らしい好み、すなわち、造園熱 (gardening craze) が描かれている。Mr. Rushworth が「庭の改良」熱にとりつかれ、造園家 H. Repton を雇って、古い屋敷を「改良 (improve)」しようとする。すると、これをおもしろがった一同が彼の屋敷 Sotherton Court へ出掛けていく。Sotherton は Bertram 家よりさらに由緒ある大地主の country seat である。ここは Maria が Henry Crawford に誘惑されるきっかけを示す重要な場になる。若い男女の心理ドラマが展開される Sotherton の庭は、古風な囲まれた整形式庭園だが、うねうねと曲がりくねった「自然林 (wilderness)」や、「隠し垣 (ha-ha)」もある。曲がりくねった道と、庭に広々とした外の展望をもたらす ha-ha は新しい時代のものである。古い庭を新しい庭にしつらえ直すことに対し、gentry たちは皆、異なる意見を持っている。だが、彼らがいずれも庭に特別の愛着を抱いていることは、描写の端々にも示されている。牧師館の Mrs. Grant は庭を改良して、遊歩道をこしらえ、ギンバイカ (myrtle) が霜にあわないよう注意している。Lady Bertram はバラ園を持ち、Fanny も East Room でジュラニウムを育てている (これは恐らく、鉢植えだろう)。

庭は gentry にとって飾りものではなく、菜園や温室で野菜や果物を栽培することは実益を兼ねた趣味でもあった。大々的なパイナップル園を持っていた *Northanger Abbey* の General Tilney とは違い、Sir Thomas は園芸に特別の趣味はもっていないが、孤独に浸るための絶好の場所として、庭の砂利道と低木の植え込みを Fanny に推奨している。(p. 323)

とりわけ熱心な園芸家は、Mrs. Norris である。彼女の関心は実用園にあり、Sotherton Court を訪れた時、その園丁から珍しいヒースの苗と、雉の卵を自分の庭用に買って帰るほどである。ムーア・パーク種のアズズの苗木に 7 シリング支払ったことを彼女は自慢にしているが、その実が一向においしくないと指摘して彼女を怒らせたのは、Grant 牧師である (p. 54)。

こうした庭への愛着ぶりは、地主である彼らの性格の良い面を示している。Mrs. Norris の堅実な園芸家ぶりは、Fanny の意地悪な God Mother である彼女の人の、別な一面を物語るのである。それは働き者としての Mrs. Norris の一面であり、後で Fanny が自分の母親と比べて、「9 人もの子供がいて、収入の少ない家の母親としては、Mrs. Norris

の方が立派にやってのけたであろう (p.390) 」と述懐する彼女の隠れた長所である。

だが、London から来た Crawford 兄妹は庭には特別の愛着など感じないのである。Mary Crawford は、庭を散歩したり、木陰のベンチに座る快適さは認めるが、自然には全く関心がなく、Fanny のように、切り倒される古い並木をいとおしみ、冬枯れの庭の常緑樹の美しさに賛嘆の声をあげるなど考えられない。Henry Crawford の方は自邸の庭をとくに「改良済み」で、一見、造園に関心が深いようにも見えるが、これも彼が土地に愛着を抱いているからではないのである。裕福な gentry の間で「庭園改良」は一種のブームであり、彼は流行に遅れをとるような人間ではないというだけのことなのだ。むしろ、その才人ぶり、変わり身の早さは「転がる石」である彼の落ち着きのない性格を示していると言える。

こうした「土地への愛着」の欠如が、結局、Crawford 兄妹の性格の欠陥につながると考えられていることは明らかである。土地の管理を代理人任せにしていることも、彼の無責任な性格をよく表しているし、土地に関心を持たない Mary が、どこか不自然な人格であるのは、もともと gentry と土地とは切っても切れない結び付きであることを考えれば、当然の帰結かもしれない。Edmund は Mary の 'lively mind' には、まじめな問題についてもまじめになれないという欠陥のあることに気づいて悩む。Fanny もまた Henry Crawford の無責任な 'flirtation' ぶりに憤りを感じるが、このように人間性の点で重大な欠陥を持つことと、地主としては「土地」に特別の愛情を持たぬ無責任な不在地主であることとは、無関係ではありえない。

Henry は、一時期、Fanny への愛のために、良い地主に生まれ変わろうと努力することがある (p.404)。このエピソードも「土地への愛着」が地主の人格にかかわることを示していると言えよう。「土地の改良」ならぬ「人格改良」に彼が成功していれば、この小説の結末は違ったものになっていただろうと作者は述べている (p.467)。だが、結局、彼は途中で投げ出してしまい、Maria との不倫に走ってしまうのである。

同じように、Edmund の聖職就任 (ordination) の問題も、gentry と「土地」との関係から説明がつく。教区牧師の職は、Edmund のように地主の次・三男の身すぎの道として確保されることが多く、その場合には収入だけが目的で、教区に居住しない者も少なくなかった。だが、Sir Thomas と Edmund は聖職について、もう少し責任のある考えを持っていた。教区牧師たるものは、教区に住み、教区民と交わらなければ、その義務が果たせないと考える点で意見が一致していたのである。これは Henry Crawford の考えとは真向から対立していた。彼は牧師としての義務などには関心がなく、聖職を単に「割りのいい収入源」としか見ないし、Mary に至っては、'Clergyman is nothing. (p.92)' とその世間的地位の低さを問題にする始末である。

このように、M.P. では「土地への愛情」の有無が、確かに「人格の高潔さ」を示す指標になっている。だが、「土地」と共に生きる伝統的な 'resident native gentry' の在り方に、Austen が固執していたと考えるのは早計であろう。時代は既に19世紀、封建領主のような「土地貴族」的在り方は、すでに時代の流れから取り残されていたのである。現に、Sir Thomas は西インド諸島に農園を持っている。「土地」は既に、イギリスの領土拡大の波に乗って、海外へと広がっていることが小説の中でも示されているのである。又、長男 Tom が Mansfield に寄りつかなかつたり、Maria と Julia が都市での生活に憧れているなど、若い世代には土地離れの傾向が見られる。

Tanner が gentry の「貴族的な土地への愛着」と言った時、彼は当然、当時のイギリスが資本主義産業社会の時代に入っていたことを視野に入れていたと考えられる。海外進出と工業化によりブルジョアの台頭がめざましかった時代である。gentry 階級についていえば、封建

領主的地主の時代は終わり、地主資本家として経営手腕を問われる時代になっていた。Austenも次作 *Emma* (1816) では、土地経営家として柔軟な手腕を見せる地主 Mr. Knightly を描き、絶筆となった *Sanditon* (1817) では先祖伝来の土地を離れて、リゾート・タウンの建設に乗り出す事業家地主の姿を描いている。こうした新しい地主の在り方に対して、作者が否定的であったとは思えない。Fanny Price が静かな M.P. に現れた Crawford 兄妹に示した嫌悪感の底には、gentry が都会で生活することへの危惧があることは否定しがたい。だが、それはあくまで倫理的な次元での問題なのである。

III プロテスタント的倫理

魅力的だが、道徳的に欠陥のある Crawford 兄妹の誘惑に抵抗し、それを退けたのは、Bertram 家の「貧しい親戚」、目立たない娘の Fanny Price の手柄である。Fanny が Crawford 兄弟の何に抵抗し、どうやってそれに成功したかという点から、London 対 M.P. の問題を見てみよう。

Fanny は Crawford 兄妹が現れた時、18歳になっていた。だが、Fanny が一人前の若い女性であるのか（つまり、結婚市場にでているのか）、まだ、少女なのか、そのところはあいまいである。この点について引っ込み思案の Fanny の態度からは判断が付き兼ねた Mary Crawford は “Pray, is she out or is she not?” (p.51) と尋ねている。“out” であれば、「社交界にデビューしている」一人前の女性ということだが、“not out” であれば、まだ、「デビューしていない」少女である。Mary によれば、大人の女性と少女の間には厳密な区別がある。少女であれば自信のない態度も許されるし、また、そうあるべきだと言うのである。ところが、Fanny の場合、外から判断が付きかねたので、上のような疑問が出たわけである。尋ねた結果、Mary の結論は、“Oh! then the point is clear. Miss Price is not out.” (p.51) であった。

Mary は Fanny を “not out” と結論づけたが、実際には、Fanny がまだ成長途上の少女であると言い切ることはむずかしい。だが、Fanny が精神的に「女学生 (schoolgirl)」であることも否定はできない¹²⁾。彼女は世間知らずな romanticist である。お世辞にも早熟なタイプとは言いがたいのである（彼女がかつて教室として使われていた East Room から、今だに離れられないのもそのためである）。Fanny が精神年齢の点で「若い」ということは、Crawford 兄妹と彼女との関係を考える際に、意味がある。まず、彼女一人が Crawford 兄弟の「魅力」から離れておれたのは、彼女が「若すぎる」と見なされていたせいである。Henry Crawford は彼女を相手にしなかったし、Fanny 自身もまた、若者特有の潔癖さで、彼の “flirtation” に反撥を感じた。

Mary に対しては、Fanny はなお一層、複雑な関係にあり、嫌悪感もそれだけ強かったと思われる。Fanny は若く、しかも、自分が “nobody” であることを常に意識している。それに対し、Mary は「理想の perfect woman」とも言うべき女性である。Mary は21歳で丁年に達しており、美貌、才気、教養とも申し分なく、20,000ポンドの財産も持っている。何よりも、自信に満ちた大胆な態度は、若い Fanny にとって、憧れの女性像である。だが、Fanny の中の「未成年的潔癖さ」はしばしば、Mary の「大人の sophistication」に対して、厳しい批判の目を向ける。それだけでなく、Fanny には、Edmund と親しくしている Mary に厳しい視線を注ぐ理由がもうひとつあった。なんとといっても、彼女は十歳の時から乙女らしく一途な気持ちで、Edmund を愛していたということを忘れてはならない。

「若い」Fanny が何よりも強く反撥したのは、Crawford 兄弟の道徳的墮落に対してであ

ったと思われる。だいたい、この兄妹のスマートな遊びぶり、「自由な」恋愛のやり方から、彼らが gentry のモラルとは程遠い異質な規範によって動いていることは容易に推測されるが、Fanny の純朴な目を通すと、Crawford 兄妹の徹底した快楽主義者ぶりには、貴族社会の退廃さを感じられてくる。これに対し、Sir Thomas や Edmund の教化の下に成長した Fanny は、田舎らしく純朴だと言う以上に、明らかに禁欲主義的である。また、彼女が世間ばなれしており、非常に潔癖だと言う点を考えると、「清教徒的 (puritan)」とさえ言いたくなる。「清教徒」Fanny は Maria と Julia の愛情をもて遊ぶ Henry Crawford の flirtation ぶりに当然、憤りを感じるであろう。また、Edmund の誠実な愛情に、素直に答えない Mary に対しても、Fanny は怒りを感じている。技巧的な、偽りの愛に対し、敏感に反応する。この彼女の「清教徒」的性格は、彼女の魅力でもある。後に Henry Crawford が彼女に結婚を申し込むほど引き付けられてしまうのも、彼女の「清教徒的」な性格の魅力が、彼にとって新鮮であったからだ。だが、そのいちずな性格はまた、Fanny をしてあくまで Crawford 兄妹への反撥を変えず、彼の求婚をも断ってしまうという行動へ駆り立てもする。

Sir Thomas の突然の帰国によって、芝居騒ぎは終わり、Crawford 兄妹は一時、舞台から引き下がる。表面的には M.P. に元の平穏さが戻ったのである。だが、芝居の舞台を取り壊し、長女 Maria を無事結婚させた Sir Thomas も、さすがに Crawford 兄妹が彼の留守中に巻き起こした悪影響にまでは気がつかない。Sir Thomas は兄妹の表面的な魅力とその財産に欺かれているのだ（このことをもってしても、Sir Thomas が非の打ち所のない有徳の gentleman ではないことがわかるというものである）。

物語はここから、思いがけない発展を見せる。これまで醜いアヒルの子であった Fanny に、スポットライトが当たり、いよいよ、彼女が主役になるのである。帰国した Sir Thomas は Fanny が「健康の点でも美貌の点でも改良 (improve) された」(p.178) ことに気付く。Fanny は Sir Thomas の姪として大事にされるようになり、牧師館の dinner にも招かれるようになった（これで Fanny は “she is out”、つまり、社交界に出たことになり、名実共に大人になったことになる）。Fanny の急激な地位の向上に Mrs. Norris は悔しがり、Fanny 自身も戸惑う程である。

こうした折も折、Henry Crawford が再び現れて、「Miss Price の胸に小さな穴をあける」(p.229) つもりで彼女に近く。だが、Fanny の控えめな美貌とその人柄は、逆に彼を捕らえ、彼の方が恋の虜になってしまうのである。

小説の後半は、プレイボーイの恋という思いがけない展開で始まる。姪が願ってもない良縁に恵まれたことを知って喜んだ Sir Thomas は、Fanny のために大舞踏会を催して、二人の結婚を実現させようと努力する。

Henry Crawford が Fanny に結婚を申し込んだ時点で、Fanny は女性として一つの勝利を手にしたと言える。これはまた、Bertram 家の一員としての彼女の地位を不動にするものでもあった。それにも拘わらず、Fanny は頑固に Henry Crawford の求婚を拒むのである。だが、Fanny は「節操 (principles)」の点で問題のある Henry の実態までは明らかにしないため、Sir Thomas はせっかくのチャンスを見逃そうとする Fanny の「良識」に失望する。（Fanny が Henry Crawford の無節操ぶりについて黙っていたのは、Maria の名誉を守るためである）

Fanny は Sir Thomas の不興を買い、M.P. を一時追い出され、Portsmouth の実家に返されることになった。Fanny は田舎の大地主の家から離れ、Portsmouth で町の下層 gentleman の生活を経験することになったのである。London, M.P., Portsmouth

という三つの場所での経験を経て、Fanny の教育は完成するという段取りである。では、Fanny が Portsmouth で得たものは何か、また、彼女はどうやって、Mansfield Park に帰ることになったのか、を考えてみよう。

Crawford 兄妹の快楽主義を否定した Fanny に、下層 gentleman である Portsmouth の Price 家はどうか映ったのだろうか。

Fanny にとって、Portsmouth の実家は決して、居心地の良いところではなかった。子沢山の家庭の貧しさ、家の小ささ、騒々しさ、だらしない生活ぶりは、Fanny を呆れさせる。父親は酒を飲み、母親は、離れて暮らしてきた Fanny に冷淡だった。

裕福な大地主の家庭から来た Fanny が、自分の両親を怠惰であると批判しているのは興味深いことである。彼女から見て、両親の家はうまく運営されておらず、貧しい家庭の主婦としては Mrs. Norris の方が、むしろ有能ではないかと、再認識するほどだった。Fanny は意外に実利的な考えもできるのである。彼女は実利的に考えるだけでなく、実際に行動も起こした。兄 William のためにシャツを縫い、妹たちに躰をしようと心を砕いた。Portsmouth の娘たちは Fanny が、ピアノも弾かず、美しい服も身につけていないのを見て、彼女が lady ではないと馬鹿にする始末である。

これはどういう意味だろう。Fanny は准男爵家で gentlewoman としての教育を受けたが、Maria や Julia のように令嬢として育てられたわけではない、ということである。Fanny は小さい時から、家族の用をいつかすることがあった。Fanny は家族と使用人の間の連絡役を勤め、Mrs. Norris の助手として裁縫もやれば、Lady Bertram の話相手となり、手芸の手伝いもした。よく lady の居間には、そのお相手をつとめる 'companion' という gentlewoman がいるが、Fanny は無給ながら、そうした companion であったと言える。'little white attic' に住む 'poor relation' の身としてはそのような仕事を引き受けざるをえなかったのであろう。また、そのようにして成長していく間に、Fanny がそうした実務的な能力を身につけたということにも注目したい。「役に立つ (usefulness)」ことが彼女の存在意義なのである。

Fanny が Portsmouth から M.P. へ帰れたのも、彼女の「有用性」が認められたからである。

Fanny の Portsmouth 滞在は無期限になるかと思われたが、物語は再度、状況一転し、彼女は急遽 Mansfield Park に呼び戻されることになった。それというのも、Bertram 家では、これまで表面化しなかった問題が一挙に噴出した形で家庭崩壊の危機が迫っており、Fanny の手助けが必要となったからである。M.P. では長男の Tom は放埒な都会生活がたたって病気になり、Rushworth 夫人の Maria は事もあろうに、Henry Crawford と駆け落ちし (Fanny に嫉妬したのである)、Julia は父親の制裁を恐れて出奔するという不幸が重なっていた。Bertram 夫妻は呆然自失し、Fanny の手助けと慰めが必要となったのである。これは 'companion' としての Fanny の能力が評価されたということである。

Henry Crawford は Fanny への愛によって生まれ変わるか、という読者の期待は、最後になって見事に裏切られる¹⁹⁾。だが、彼が最後までドン・ファンであり続けることは、初めから意図されたものである。結局、M.P. はロンドンから来た不在地主の Crawford 兄妹のお蔭で一時、混乱に陥るが、Fanny の「清教徒主義」によってその誘惑を退け、さらに Fanny の「有用性」によって立ち直るという構図が浮かびあがってくる。

だが、結論を引き出す前に、Fanny から見た M.P. を検討してみることにしよう。Fanny は下町にある Price 家で、M.P. の良さを改めて意識することになった。その一つは田舎の自然の中にある M.P. への評価である。Portsmouth には、春の訪れを告げる緑のないことを、Fanny は寂しく思う。自然を求める Fanny の気持ちは、gentry らしい「土地への愛着」の女性ら

い表明だと考えられる。

第二は Mansfield の静穏な生活の価値である。‘tranquility’、或いは、‘serenity’ というのは抽象的な言葉だが、Bertram 家の穏やかな生活に、Fanny は価値を見いだすのである。その対局には、Portsmouth の貧しさが引き起こす「混沌ぶり」、その具体的イメージとしての騒音、家の狭さがある。

M.P.の穏やかな生活は、物質的豊かさの産物でもあるが、よく考えてみれば、Fanny は貧しさを恐れているわけではない。M.P.の価値として、Fanny が何よりも強く意識しているのは、理性によってコントロールされた生活の良さである。Fanny は、個人の尊厳もプライベートも守られない両親の家の乱雑な状態の中で、M.P.の「静穏」を懐かしく思い出すのである。

At Mansfield, no sounds of contention, no raised voice, no abrupt bursts, no tread of violence was ever heard; all proceeded in a regular course of cheerful orderliness; every body had their due importance; every body's feelings were consulted. (p.392)

Mansfield の良さは、物質的な豊かさではなく、むしろ、人間関係の秩序にあるのである。その秩序の原動力は Fanny の考えによれば、‘delicacy’ や ‘decorum’ といった gentry 特有のルールである。「誰もがそれなりに重要だった。すべての人の気持ちを汲むように配慮されていた」の ‘every body’ という言葉に Fanny は恐らく、「貧しい親戚」及び「女性」を含めていたであろう。

Portsmouth が、女性である Fanny にとって居心地のよいところではなく、男性中心の社会であったことも、Fanny の幻滅の重要な要因と思われる。Fanny は父の粗野な態度に面食っているが、Mr.Price は海の男で、海は男性の世界である。彼が娘の意向など頓着せず、自分のペースで散歩をする (p.403) のも当然なのである。Portsmouth とはそのような男性中心社会であり、Mrs.Price が娘より、息子に愛情を感じるのもこうした価値観に基づいているわけなのである。

Portsmouth に比べると、M.P.が女性にとって暮らしやすいところであることに、Fanny は気がつく。Austen と同時代の女権論者 (feminist) Mary Wollstonecraft (1759-1797) は、およそその社会でも、どの階級でも、女性は理性と判断力を備えた一人前の人間として認められていないと嘆いたことで知られている¹⁴⁾。だが、M.P.ではこの嘆きは外的外れであり、少なくとも、M.P.の ‘delicacy’ は女性の味方である。Austen の作品では男女が同等であり、信頼しあっている様子がごく自然に描かれているので、我々は、現実には Austen の genteel な世界においても、Wollstonecraft の問題があっただろうということを、つい、見逃しがちである。だが、Austen は、敢えて女性にとって理想的な状態を描くことで、Wollstonecraft の嘆きを克服しようとしたと言えないだろうか。「わたしは出来る限り、彼女 (皇太子妃) を支持したいと思います。彼女が女性であるからです・・・」と、Austen は手紙に書いたことがあった¹⁵⁾。彼女も隠れた feminist なのだ。Portsmouth の場面では、Austen は珍しく現実を描いているのである。

Portsmouth とは違って、M.P.で女性が貶められていないのは、gentry のマナーが防波堤の役を果たすからである。マナーはしばしば Fanny を救ったことがあった。例えば、Sir Thomas の留守中に、Tom が Edmund の反対を押し切って芝居を上演しようとした時のこ

とである。人数が足りないので、端役が Fanny にも割り振られることになった。そこで、Tom が Fanny に出演依頼するが、Fanny は断る。(その理由は複雑で、まず、第一に Edmund の影響で、芝居そのものに反対であったことがあげられる。だが、第二の理由、内気な Fanny には舞台上で人前に立つ勇気がないと言う理由も見逃すわけにはいかない)。

Fanny は申し出を断った。だが、一同の視線が自分に集まっているのを感じただけで「ショック」を受けてしまう (p.145)。お節的な伯母の Mrs. Norris が叱りつけようとする。だが、その機先を制して Edmund が次のように言う。

‘Do not urge her, madam,’ said Edmund. “It is not fair to urge her in this manner. —You see she dose not like to act.—Let her choose for herself as well as the rest of us. —Her judgement may be quite as safely trusted.—Do not urge her any more.” (pp.146—7) (イタリックは筆者)

おとなしい Fanny を庇い、しかも、Fanny の理性に、十二分の信頼を寄せていることを知らせる発言である。Edmund の言い分は、Fanny の判断力は信頼できるものであるから、決断は Fanny に任せ、周囲の者が口出しをするべきではないというものである。

だが、その場はそれで取まらなかった。Mrs. Norris は Fanny を叱りつけ、恩のあるいとこの頼みを引き受けるのは、Fanny の義務ではないかと言う。これを聞いて、Edmund は怒りの余り言葉を失ってしまう。居合わせた Mary Crawford は一瞬あっけにとられた。だが、明敏な彼女は、忽ち事情を察し、さりげなく「椅子をずらし」て、Fanny には優しい言葉をかけた。そして、兄に目配せをして話題を変えてしまうのである。(p.147)。

この場面は Mary の気持ちの優しさを示すとともに、gentleman のマナーの根幹である ‘delicacy’ についても考えさせる場面である。Fanny の立場と気持ちを察して、さりげなくその場を救った Mary の思いやりに比べて、他人の前で Fanny の微妙な立場 (poor relation であること) について言及する Mrs. Norris の行為は明らかに ‘delicacy’ を欠くものであり、マナー違反なのである。

以上のことを考えると、Fanny だけでなく、作者も ‘elegance’ を最高の価値とする gentleman のマナーというものに、大いに期待していたとすることができるであろう。マナーは「弱者」への防波堤の役割をするのである。マナーが遵守されている限り、Austen のヒロインたちは、男性から「理性」と「判断力」のない劣った生き物として、理不尽な扱いを受けることから守られているわけである。

だが、勿論、これはマナーの通用する genteel な世界に限られるわけであるから、Fanny としては次のような認識を、上の経験から持つに至ったと考えられる。即ち、彼女は弱い立場にあり、‘delicacy’ や ‘decorum’ によって辛うじて守られているにすぎない。だが、decorum はいつも遵守されるとは限らない。引込み思案では侮られるばかりである、それには「自己への信頼」がどうしても必要だ・・・と。

「自己への信頼 (self-reliance)」はヒロインの成長に欠かすことはできない出発点である。Austen はヒロインが「理性と判断力」を働かすことを、常に要求した。彼女の小説はすべて、ヒロインが「理性と判断力」を身につけ、それを働かすことを学ぶ過程を描いていると言える。Austen のヒーローたちは、常に、ヒロインが「理性と判断力」を行使することを期待し、援助する役割を果たしている。Edmund は Mrs. Norris に、‘Let her choose for herself as well as the rest of us.—Her judgement may be quite as safely trusted.—Do

not urge her any more.」と言う。また、Sir Thomas も Fanny を翻意させたいと思えば、まず、条理をつくして「説得」にかかるのである。彼がFannyの理性に期待をしていなかったら、とうに強制的手段に訴えていたに違いない。

M.P.とは、このような delicacy が価値を持つ場所であった。「貧しい親戚」にすぎない、きまじめで、だが、働くことの好きな Fanny は、Portsmouth と引き比べて、より洗練された地主の生活を選び、さらに、Henry Crawford の妻としてロンドンで生活するよりも、Mansfield Park での「役に立つ (useful) 」な生き方を選びとった。彼女は最後には、Edmund と結ばれ、M.P.の教区牧師の妻となる。だが、これは M.P.の後継者になることを意味するものではない。結局、Fanny は牧師の妻としてあくまで「奉仕」の人生を送るのである。

「有用性」は清教徒的で、ブルジョア的な価値である。女学生のような Fanny は多分に清教徒的でさえある。Fanny ばかりではない。Crawford 兄妹の「自由・快楽主義」に対する Sir Thomas の「勤勉・禁欲・義務・誠実」は gentry の中に、ひとつのはっきりした性格が既に生まれていたことを示している。

Max Weber はイギリスの国民性の中に「二つの性格、即ち、ありのままの素朴な人生の喜びを味わおうとする性格と、厳密な規律と自制によって自己を支配し、形式的な論理的規制に身を委ねようとする性格 (both elements, that of an unspoiled naive joy of life, and of a strictly regulated reserved self-control, and conventional ethical conduct) 」¹⁶⁾を見た。Austen も Crawford 家と Bertram 家という二つの gentry 一家に、相反する二つの性格を見たとも言える。Max Weber は前者を squire 階級の性格、後者をプロテスタント的と考えた。そして、'protestant ethic'こそ、資本主義的生活様式を発達させる原動力となった精神だとした。Fanny はM.P.の長所は「万事が朗らかに、秩序正しく進められた (all proceeded in regular course of cheerful orderliness) (p.391) ことだと考えたが、これと Max Weber によるメソジストの「組織的方法によって合理化された倫理的生活態度 (methodically rationalized ethical conduct) 」には共通したものがあるように思われる。

IV 終わりに

小説 *Mansfield Park* は Fanny という内気なヒロインの自立の過程を描いているが、このか弱い女性を試金石として、gentry の本質を問おうという作者の意図が背後に感じられる。London からきた不在地主の Crawford 兄妹との比較によって明らかになるのは、gentry としての本質を見失い、その義務を怠っている者の「空虚な自我」なのである。

だが、Bertram 家の倫理意識を探るうちに、資本主義の精神と似たものに行き着くのは、19世紀初頭という時代背景を考えればむしろ当然であろう。Austen は時代の流れに敏感であり、次々作 *Persuasion* (1818) では、准男爵の娘 Anne Elliot が Fanny を上回る実務的能力を発揮する様子を描いている。Anne Elliot は先祖伝来の Kellynch-hall という「土地」を捨て、家政の手腕を重宝がられて妹の家で生きていく。そして、最後には、家柄も土地も持たない海軍大尉と結婚するのである。ここでも、一見、古風な性格の Anne Elliot が、「有用」という新しい美德で彼女の人生を切り開いていく新しい女性であることが示される。女性の自立の過程をたどるうちに、どうやら gentry の世界にも新しい時代が開けてくる気配である。

注

- 1 テキストは *The Novels of Jane Austen*, Vol. III, ed. R. W. Chapman, 3rd Edition. (Oxford Univ. Press, 1933) を用いた。以降、このテキストからの引用はすべて本文中の括弧によってその頁数を示す。
- 2 フェミニズム批評の J. Austen 論は数多いが、Margaret Kirkham, *Jane Austen: Feminism and Fiction* (The Harvester Press, 1983) が M. Wollstonecraft とのかかわりを考察して示唆に富む。他に、Susan Morgan, *In the Meantime* (Univ. of Chicago Press, 1980)、Meenakshi Mukherjee: *Jane Austen. Women Writers.* (Macmillan, 1991) 等。
- 3 See Isobel Armstrong, *Jane Austen: Mansfield Park*. Penguin Critical Studies. (Penguin, 1988) p. 26.
- 4 多忙であることは、自我が空虚であることを示し、この作品ではむしろ悪である。
- 5 See Henry Austen's "Biographical Notice of the Author", *The Novels of Jane Austen, op. cit.*, Vol. V, p. 5.
- 6 G. E. Mingay, *English Landed Society in the Eighteenth Century* (Routledge and Kegan Paul, 1963) によると、1790年の England と Wales の地主のうち、年収5,000~6,000ポンドの地主を 'great landlords'、3,000~4,000ポンドの地主を 'wealthy gentry'、1,000~3,000ポンドの地主を 'lesser gentry'、それ以下を 'modest gentlemen' としている。'great landlords' は大部分が貴族である。尚、*Mansfield Park* の執筆は1811~1813年であり、Sir Thomas の年収は推定10,000ポンドである。See p. 26.
- 7 G. E. Mingay, *op. cit.* によれば、London で社交シーズンを過ごすには3000~4000ポンド以上の年収が必要だった。p. 21
- 8 Sir Thomas は下院議員であるので、国会会期中は上京する。また、長男 Tom は London にいりびたっている。
- 9 R. W. Chapman ed., *Jane Austen's Letters* (Oxford University Press, 1959), p. 50.
- 10 Tony Tanner, *Jane Austen* (Macmillan, 1986) pp. 144-6.
- 11 一方で、*Mansfield Park* は Fanny の実家である Portsmouth とも比較されている。Portsmouth は港で、Price 家は父子三人が海軍に勤めている。ここは土地という安定した基盤を持たない代わりに、個人の力で出世可能な、海の男の町である。このことから *Mansfield Park* が「土地と結び付いた」世界であることが浮かび上がってくる。
- 12 Fanny の未熟さについては、Kenneth L. Moler, "The Two Voices of Fanny Price" *Jane Austen: Bicentenary Essays* ed. John Halperin (Cambridge University Press, 1975) を参照されたい。
- 13 Fanny に求婚中の H. Crawford が Maria と駆け落ちしたことで、彼の求婚を断わった Fanny の正しさは証明されたことになる。
- 14 Mary Wollstonecraft, *Mary and the Wrongs of Women*. The World Classics. (Oxford Univ. Press, 1976)
- 15 R. W. Chapman, *Jane Austen's Letters, op. cit.*, p. 504.
- 16 Max Weber, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* translated by T. Parsons. (London, Unwin University Books, 1930) p. 125
- 17 Max Weber, *op. cit.*, p. 173

Summary

In *Mansfield Park* Jane Austen focusses on a wealthy gentry family and its "poor relation", Fanny Price. Fanny knows she is "nobody" among the remarkably fine family. The novel describes how she grows into a true heroine who can judge and act on her own. In doing so, however, the authour also uses this sensitive heorine as a view-point to cast a critical view on moral aspects of the gentry. Being an outsider, Fanny calmly observes the baronet's family and their neighbours, the Crawfords, their merits and faults as well. Through Fanny's eyes we find that the life of the Bertrams, "resident native gentry", is puritanically stoical, while that of the Crawfords, "non-resident gentry", is epicurean. Fanny's moral principles and usefulness remind us Max Weber's protestant ethic'. This essay attempts to examine Jane Austen's gentry world from woman's point of view.

